



| | |
|------------------|---|
| Title | 『分類思考の世界 なぜヒトは万物を「種」に分けるのか（講談社現代新書）』三中信宏 [著]（講談社, 2009年, 328頁, 840円） |
| Author(s) | 大館, 智氏 |
| Citation | 哺乳類科学, 50(1), 117-118 |
| Issue Date | 2010 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/44416 |
| Type | column |
| Note | 書評 |
| File Information | MS50-1_117-118.pdf |



[Instructions for use](#)

『分類思考の世界 なぜヒトは万物を「種」に分けるのか
(講談社現代新書)』

三中信宏 [著]

(講談社, 2009年, 328頁, 840円)

本書は2006年に講談社から同著者により著された『系統樹思考の世界：すべてはツリーとともに』の姉妹本である。本書の記述には前書との重複する部分が多いが、前書は系統という生物体系をタテにみた世界を中心に論を展開しているのに対して、本書は分類というヨコにみた場合をより詳しく述べている。哺乳類をはじめ生物や生態系に関心のある我々は、自分の研究がどの時空あるいは方向を扱っているのか常に気をつけて置くべきである。より深い理解のためには本書は前書と対にして読むのがベターである。

生物に限らず物事を分類するのは人間の認知的特性に基づいている、というのが三中氏の以前からの主張である。人間には分類したいという心理的要求がある反面、分類行為には脳生理学的制約と論理思考の限界がある。そして分類を行う際、物事には「本質」があると無意識に感じてしまう「心理的本質主義」の思考的制限があることはどうしても避けられないという。つまり、生物分類には、「種」タクソンが実在するとの大前提のもとに作業が進められている。現場の生物分類学者やその成果を利用する多くのものにとっては、思考制限や、たとえ種

の实在性に問題があっても、分類行為自体にはさほど影響しないだろう。しかし形而上学的に見ると、種の实在性とそれにもとづく自然分類は大きな問題を孕んでいる。種問題については、多くの議論があり、その論争はしばしば感情的になり泥沼化し、なにが問題で、なにが論議されているのか不明瞭になりがちである。本書は分類学と種問題の複雑多岐にわたる学説と論争について、その歴史と問題点をよく整理した力作である。

著者の三中氏はこのような複雑怪奇な情報をうまく整理する一種の天才である。三中氏の専門の一つに生物統計学がある。私と同じ程度か少し若い世代は、統計的手法を実用し始めた学求人生の初期には、多変量解析、ノンパラ検定、MCMC、最尤法といった従来の伝統的正規分布に基づく方法とは異なった統計的手法が一般化し、頭が混乱した経験をお持ちの方も多いただろう。そんな時、我ら統計学に疎い迷える羊を救ってくれたのは、コピーによる複写で全国に広まった三中氏作製の「統計マングラ」の相関図である（もっとも私がこれを入手したのは泥沼にはまったずっと後のことになるが……）。同様に、本書は種問題や分類学についての難解かつ多岐にわたる論議を俯瞰するのを助けてくれるであろう。三中氏の分類、系統についての著作は難解なものが多いが、本書はそのなかにあって例外的にわかりやすい。本書では、哲学や科学史の小難しい古典から最新の分類学論議まで広く引用しているが、それと同時にいわゆるサブカルチャーのキワモノである妖怪、マンガや大衆文学、果てはアイドル芸能人やキャラクターものをも引き合いにだし、権威ある著作の合間に巧妙な比喩として使っていることも本書がわかりやすい理由の一つであろう。当代まれな読書人、好事家として知られる三中氏ならではの仕事である。語彙や文体こそ近年あまり見られなくなった格調高いインテリ風ではあるが、そのなかに大衆文化を織り込み理解しやすくする、という彼の本の作り方をみるのも一興だろう。

本書を敢えて哺乳類科学で紹介したのは、本書において徳田御稔の「種实在論」が問題視されているからである。三中氏は、徳田は日本の進化研究に「種族維持の単位としての種」という負の遺産を残したと断じている。徳田御稔は、第二次大戦前後に生物地理的研究や齧歯類の分類を推進したことで、直接、間接に、現在の多くの日本の哺乳類学者に影響を及ぼしている。私もその系譜の末端に位置しているのだから。戦後、徳田のラマルクの進化論はひととき日本を席卷したが、それが現在誤りであると分かっても、日本の哺乳類研究への正の貢献からか、敢えて大きな徳田批判や総括は起こらなかった（そ

れとも単に忘れ去られたのか？）、と私は感じている。それが故に無意識に徳田流の種概念にとりつかれ、日本の哺乳類研究者の多くは、「種の实在」について始めから疑うことなどしていないのではないか？それが日本における哺乳類の分類学や進化研究に負の影響を与えてはいないだろうか？三中氏は「幸せな研究者人生を送るためには、いっそのことそういう“形而上学”的な問題にはいっさい首をつっこまないことが最善かもしれない」(p. 185-186) とのべ、「存在」についてあれこれ悩み始めると不幸が始まるということを行っている。明らかに反語である。この悩んでいる三中氏自身の種問題への立場は、「生命の樹」そのものを示すユニークかつ究極的な時空ワームただ一つを仮定すればそれで十分であろう」(p. 254) という記述がそれらしい。そもそも前置きに「時空ワームの愛する断片に本書を捧ぐ」とあるので、これが彼の種問題への現在の結論であろう。

いずれにせよ、種の实在についての合意はなかなかできそうもない。しかし、難しいからといって、「思考停止」の状態になり、黙々と目の前にある個々の仕事のみをこなすのは、サイエンティストとして後ろ向き過ぎはしないか？結論は出ずとも、悩んで、泥沼と格闘すべきでないか？これは分類、系統学にかぎったことではない。現在、哺乳類研究でさかんな保全生物学しかりである。そもそもなぜ保全しなくてはならないのか、そして保全すべき対象はいったい何なのか？「種」だとすれば、種問題は避けて通れない問題だ。本書の帯にキャッチ・フレーズとして「分類せずにはいられない……生物学者たちの知的格闘史！」とでかでかど書いてある。形而上学的格闘なくして研究者たり得ないと私は思う次第である。哲学者たれ、日本の哺乳類学を目指す若者よ！

大館智氏（北海道大学低温科学研究所）

✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp